

2024年10月11日

報道関係者各位

国立大学法人筑波大学
国立大学法人筑波技術大学

「分離的な場」は障害者にとってポジティブな心理的変容をもたらす

中途視覚障害者にとって、視覚特別支援学校のような障害者が集まる「分離的な場」の存在が、受障後の前向きな心理的変容に大きく貢献していることを見いだしました。障害の有無に関わらないインクルーシブな社会の実現のためには、分離的な場の果たす役割への理解も重要であることを示しました。

日本では多くの中途視覚障害者が、障害の受障後、視覚特別支援学校で社会復帰を目指しています。障害のある人々が集まる場は「分離的な場」といわれ、しばしば批判の対象となりますが、視覚特別支援学校もまた視覚障害者が集まる場であり、分離的な場としての側面を有しています。

障害の有無に関わらず、ともに社会に参加するインクルージョンの理念はとても大切です。しかし、最近の研究では、その実装に伴って分離的な場が失われたことによる負の影響も報告されており、分離的な場の積極的な意義についても検討する余地がありました。

本研究グループは、これまで、視覚特別支援学校への入学により、中途視覚障害者が前向きな心理的変容を遂げることを明らかにしてきましたが、なぜそれが生じるのかは解明できていませんでした。

今回、障害当事者から聞き取り調査を行い、その語りの分析から、分離的な場としての視覚特別支援学校には、当事者のポジティブな心理的変容に貢献する2つの機能として、①出会いにくい同じ境遇を有する当事者同士を出会わせ、相互に助け合い、協力し合う場所、②障害に特化した専門性を有し、当事者のニーズに配慮した教育活動を展開し、視覚障害がさらに進行当事者を受け止め、自信を与える場所、という役割を担っていることが分かりました。

インクルーシブな社会の実現のためには、分離的な場に対する柔軟な理解も重要だと考えられます。

研究代表者

筑波大学人間系

宮内 久絵 准教授

筑波技術大学保健科学部保健学科

松田 えりか 助教（筑波大学大学院障害科学学位プログラム博士課程3年）

研究の背景

中途視覚障害は、発生頻度が少ないという視覚障害そのものの特性に加え、その多くが進行性の疾患によるものであり、見え方を理解してもらうことが難しく、周囲から誤解されやすい障害種とされています。世界各国では主としてリハビリテーションセンターが中途視覚障害者の社会復帰を支援していますが、日本では視覚特別支援学校も社会復帰支援の場となっており、中途視覚障害者の中には、障害の受障後、視覚特別支援学校の職業課程に入学し、社会復帰を目指す人たちもいます。視覚特別支援学校は全国に67校あり、その多くが、幼稚部から成人が在籍する職業課程までを設置しています。職業課程(58校)では、鍼灸マッサージの職業教育が実施されています。

障害のある人々が集まる場所は「分離的な場」といわれています。このような場は、障害のある者も障害のない者もともに社会に参加するインクルーシブな社会の実現において、障害のある人々を社会から隔離し、社会参加を妨げるという理由から、しばしば批判の対象となっています。視覚特別支援学校もまた、視覚障害当事者が集まることから、分離的な場としての側面を持っています。

インクルーシブな社会の実現は、障害の有無に関わらず、すべての人が互いに個性や特徴を認め合い、一緒に活動する上で重要です。しかし、最近の研究では、障害当事者に対する支援のないまま、インクルージョンの実装により場所の統合が図られた結果、より深刻な生きにくさを抱えて暮らす障害当事者やその家族が存在している現状もあり、分離的な場が失われたために負の側面が生じることも報告されています。そのため、分離的な場の積極的な意義についても検討する余地がありました。

本研究グループはこれまで、分離的な場である視覚特別支援学校に着目し、大規模な全国調査の中で、視覚特別支援学校への入学により、中途視覚障害者が自分自身をポジティブに捉え、心理的な回復と成長を遂げていることを明らかにしてきました (Education Sciences, 2023)。しかし、そのプロセスや理由については、解明できていませんでした。

研究内容と成果

本研究では、6校の視覚特別支援学校の職業課程に在籍する21人の中途視覚障害者に対し、インタビュー調査を実施しました。インタビューは、「視覚特別支援学校に入学したことにより変化したことはありましたか?」、「その変化を促したものは何ですか?」という質問を軸に展開しました。

インタビューでの発言内容を分析した結果、視覚特別支援学校への入学により中途視覚障害者に生じた前向きな心理的変容とは、具体的には、強い自己の認識、新たな可能性の発見、他者との関係の強化、人生に対する感謝の芽生え、の4つであることが分かりました。

また、こうした心理的な回復と成長に関して、視覚特別支援学校が有する分離的な場としての2つの特徴的な機能が、その誘発に大きな貢献をしていることを見いだしました。

第一に、同じ境遇の中途視覚障害者や、年齢、障害の程度の異なる多様な視覚障害者が集まり、視覚障害が低発生頻度障害であるがゆえに出会いにくい同じ境遇を有する当事者同士を出会わせていたことです。また、彼らが相互に助け合い、協力し合う場所でもあり、他者のために努力し、ときに他者のロールモデルになる経験ができる場所となっていました。

そして第二に、生徒の目の見えにくさに配慮した授業や部活動などの教育活動が展開されており、拡大教材・支援機器の利用や、鍼灸マッサージという職業を知る機会になっていたことです。このことが、目の見えにくさが徐々に進行し、制約が少しずつ拡大していく状況にある当事者たちを受け止め、新しい目標を発見し、自信を与える場所としての機能につながっていました。

これらの機能はいずれも、障害者が集まる分離的な場の特性に基づくものであり、中途視覚障害者が障害の受障後に心理的な変容を果たす上で、分離的な場の果たす役割も重要であることを示しました。

今後の展開

インクルージョンの実装が進む中で、障害のある人たちが集まる特別な場は批判されがちですが、分離が必ずしもすべてに悪影響を及ぼすとは限りません。今後、分離的な場に対する一方的な批判的主張に問題を提起し、こうした場の重要性についても、柔軟な理解を促していきます。

研究資金

本研究は、科研費による研究プロジェクト（22J10451）の一環として実施されました。

掲載論文

【題名】 The Meaning of Segregated Placements from the Perspectives of People with Acquired Visual Impairment: Focusing on Posttraumatic Growth and Japanese Schools for the Blind.

（中途視覚障害者の観点からみた分離的な場の意味—Posttraumatic Growth と視覚特別支援学校に焦点を当てて—）

【著者名】 Matsuda, E. and Miyauchi, H.

【掲載誌】 *British Journal of Visual Impairment*

【掲載日】 2024年10月8日

【DOI】 10.1177/02646196241283527

問合わせ先

【研究に関すること】

宮内 久絵（みやうち ひさえ）

筑波大学 人間系 准教授

URL: <https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000003562>

【取材・報道に関すること】

筑波大学広報局

TEL: 029-853-2040

E-mail: kohositu@un.tsukuba.ac.jp

筑波技術大学広報室

TEL: 029-858-9311

E-mail: kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp